

兵庫県におけるヒメトビウンカの

イネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の季節推移

○城戸剛・八瀬順也・田中雅也（兵庫農技総セ）

近年、兵庫県ではイネ縞葉枯病の再流行が懸念されている。本病は県下で1980年代に流行し、減収率が20%を超える圃場が発生するなど大きな問題となった。1992年以降本病の発生は減少し、1996年には発生は見られなくなり（図1）、媒介虫であるヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス（RSV）保毒虫率も低下して2001年には1%以下となった（図2）。しかし、2008年に再び発病が認められ、発病株率、保毒虫率共に増加の傾向を示しており、2012年の発病株率は4%、2013年の保毒虫率は3.2%となった（図1、2）。

イネ縞葉枯病の効率的な防除のためには、ヒメトビウンカの周年的な動態を把握することが重要である。ここでは保毒虫率に着目し、その季節推移を調べたので報告する。県内の3地点で調査したところ、保毒虫率は第1世代（コムギ）に比べて第4世代（水稻）では上昇し、翌年の越冬世代（コムギ・畦畔）で最大となり、その後第1世代（コムギ）では低下する、季節的なパターンが示された（図3）。また、保毒虫率の上昇程度は、第1世代での保毒虫率が高い地点で大きくなる傾向が見られた（図3）。他の事例において、初期発病の多い圃場では栽培期間中に保毒虫率が上昇する現象が見られていることから、保毒虫率の高いヒメトビウンカ群が水田に侵入することによって水稻の罹病率が高くなり、それがヒメトビウンカの新たなウイルス獲得につながっていることが推察される。

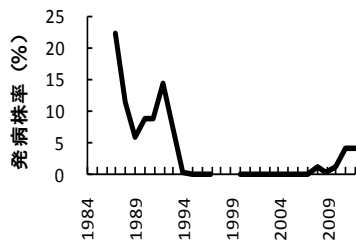


図1. 8月下旬におけるイネ縞葉枯病発病率の年次推移

※18～36地点における調査

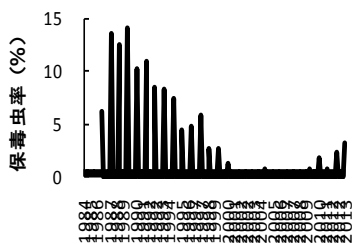


図2. ヒメトビウンカ第1世代におけるRSV保毒虫率の年次推移

※ラテックス凝集反応法により検定

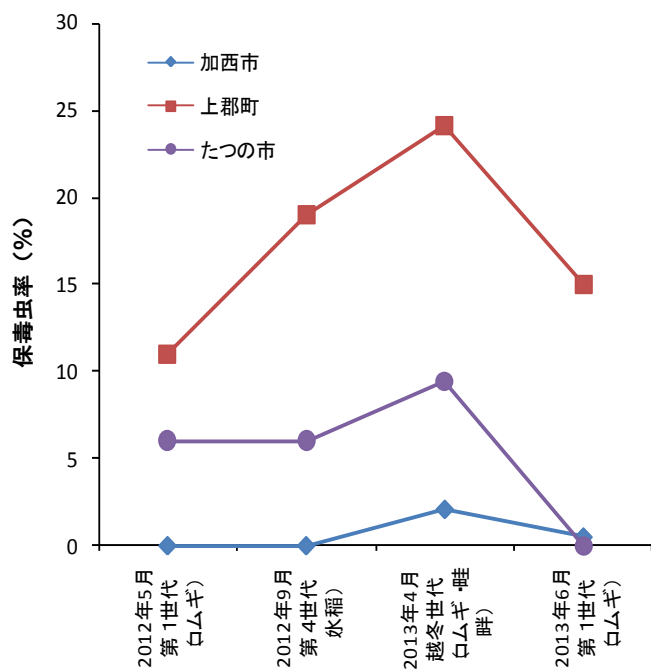


図3. ヒメトビウンカ RSV 保毒虫率の季節推移

※ラテックス凝集反応法により検定